

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 ヨハネによる福音書 6：30－40
2025年4月17日(土)

◆文脈と言葉

- 4つの福音書すべてに記されている、5,000人が5つのパンと2匹の魚で満腹した奇跡の後、ヨハネによる福音書は、主イエスと群衆のやりとり（その後に主イエスと「ユダヤ人たち」のやりとり）を記します。
- 主イエスのご自身が命のパンであられることを奇跡でしるしとしてあらわされ、ご自身でも語られたのです。
- ここでのやりとりと35節の「……飢えることがなく……渴くことがない」という言葉は、シカルの井戸端でのサマリアの女性との会話を思い起します。

◆黙想のすじみち

(1) あらすじと説き明かし

- 「神がお遣わしになった者(主イエスご自身)を信じること、それが神の業である」(29節)と主イエスがおっしゃると、群衆は「信じさせてください。しるしを見せてくだされば信じます」と言うのです。彼らは確かに何かを求めています、その問いは的外れです。求めているものも何なのかわかっていないのかもしれませんが。
- 群衆がしるしの例として出したのはモーセとイスラエルの民の荒れ野の旅におけるマンナの出来事でした。あの出来事は確かに神がイスラエルの民を飢えから救った話ですけれど、あくまでも肉体への食糧の話でしかありません。けれども、今点の父が与えてくださるまことのパン（御子イエス）はまことの命であり、世に命を与えるものなのです。
- わかったのかわらないのか、それでも群衆は主イエスに導かれて「その（命を与える）パンをいつもわたしたちにください」と願いを述べます。この願いは正しいものでした。そこで主イエスのご自分こそが命のパンであることを宣言なさいます。
- けれども、信じる者と信じない者がいます。主イエスは父の御心に従われます。選ばれた者は自ら応答して主イエスを信じます。そして、父なる神の御心はこれらの信仰者は終わりの日に復活の命に与ることです。
- 人は主イエスをなかなか理解せず、なかなか信じません。けれども、少なくとも群衆に対しては、主イエスはあきらめておられません。神は信じる者すべてに永遠の命を与えてくださる、と招き続けておられるのです。